

学校教育における被害者支援

— 性犯罪被害者への理解と支援 —

浦野エイミ*

Psychological Support for Victims in School Education — Sympathization and Support for Victims of Sexual Crime —

Eimi URANO

はじめに

学校が抱える児童・生徒に関する問題には様々なものがある。不登校、いじめ、通常学級の発達障害児への対応などの他に、件数は少ないが事件や事故の被害者となった児童・生徒への支援も挙げられる。学校内で起こった転落事故や傷害事件やいじめ自殺などの他に学校外での交通事故や犯罪などで被害者になる場合が考えられる。学校内の場合は被害を受けた児童・生徒だけではなく、周りの児童・生徒や教職員への心のケアも必要となってくる。管理職の指揮の下で担任、学年主任、養護教諭、スクールカウンセラーなどの関係教職員がチームとなって心のケアや保護者対応を行わなければならない（浦野, 2019）。このような学校全体で取り組まなければならない支援については「学校における緊急支援」というマニュアルが福岡や京都の臨床心理士会をはじめ何冊も発行されている。筆者はこれまでにスクールカウンセラーや教育相談専門員として学校で起きた事件・事故の緊急支援に何度か携わったが、これらのマニュアルを参考にして支援を行った。事件・事故などはいつ起こるかわからず予測不能である。日頃からマニュアルや関連本に目を通しておき基礎知識を持っておくことの必要性を実感している。

また筆者はスクールカウンセラーや教育相談専門員以外に犯罪被害者支援の心理相談を20年ほど行ってきた。相談を受けた犯罪には傷害、性犯罪、殺人、交通事故など心身に被害を受けた場合が多く、中には小学生、中学生、高校生とその保護者ということもあった。このような学齢期の被害者の場合には本人だけではなく保護者の心のケアも大切になるが、さらに学校の理解と適切な対応がいかに重要かを痛感してきた。

今回は犯罪の中でも学校の理解が特に得にくいと

感じられた性犯罪の被害に遭った児童・生徒の支援に焦点を当ててみたいと思う。学校が被害児童・生徒の心情をよりよく理解して適切な対応を行うことが二次被害を予防し、回復の手助けになると思うからである。

被害に遭って最初に関わる人が多い担任や養護教諭が基礎知識を身に付け、それを基に当該の児童・生徒の理解と受容を行った上で管理職やスクールカウンセラーなどのチームの中で要になってもらいたい。その時にこの拙稿が少しでもお役に立てばという思いでまとめてみることにした。

性犯罪被害の理解

児童・生徒の性犯罪被害は必ずしも警察への被害届が出されるとは限らず、その実態を把握することは難しい。内閣府男女共同参画局が3年に1度実施している「男女間における暴力に関する調査」がある。平成29年度、20歳以上の男女5000人に実施（回収率67.5%）した報告書の中に「過去に異性から無理やり性交された経験について」の項目があり、女性7.8%、男性1.5%が「有り」と回答している。「警察へ連絡・相談した」のは、そのうちの3.7%にすぎず、「誰にも相談しなかった」のは56.1%（女性58.9%、男性39.1%）となっている。その時期であるが未成年時代と回答したのは36%である。そしてその加害者の19.4%は監護する者となっている。この調査報告からみても全国的に児童・生徒の性犯罪被害が少なくないことがわかる。

また、熊本市にある「ゆあさいどくまもと」（性暴力の被害者を24時間体制で支援する機関）の平成27年6月開設から5年間の相談数延べ3616件のうち3～4割が未成年者からの相談であった。平成29年度だけを見ても延べ783件の相談のうち、未成年者からは25.4%の199件となっている。その中で小学生以下41件、中学生52件、高校生55件の計148

* 熊本大学大学院教育学研究科

件が学齢期である。加害者は身近な人であることも多く、実父母などの場合や学校関係者、部活の指導者などの場合も目立つとのことである。また令和元年度の相談は延べ622件でその中の未成年者からは247件と約4割に上り、最多となっている。全件数を罪種別にみると、強姦性交232件、強制わいせつ164件、DV・ストーカーなどの被害121件と続き、中には父母など監護者による性交やわいせつ被害も28件含まれるとのことである。これらの被害者がすべて警察に被害届を出したとは限らず、本人や家族がその苦しみを抱えて心身の調子を崩して登校ができなくなった事例もあるのではないかと推察される。筆者が相談を受けた事例にも通学途中で被害に遭い、警察に被害届を出した後も加害者が捕まるまでは再被害の恐怖や心身の不調から登校できないという被害者が少なくなかった。学校の対応も様々であり、理解を示して特別の配慮をしてくれるところもあれば、被害者の気持ちよりも学校の規則を優先する対応しかしてもらえないところもあった。体の傷に比べて心の傷（心的外傷）は目に見えないため、周囲の理解を得ることが難しい。しかし成長期の被害者にとって、家族や学校の適切な対応がその回復力を強めることになると言える。そのため家族や学校関係者が性犯罪被害者の心の傷についての理解を深め、適切な対応を身につけてほしいと願っている。

心的外傷（トラウマ）とは事件・事故・災害などを体験した際の、自分では対応できないほどの強い刺激的・打撃的な体験を加えられた時にできる心の傷のことをさすと言われており、客観的現実だけでなく心的現実（主観的体験）が重要とされている（久留，2003）。

では心的外傷となる出来事にはどんなものがあるか見ていきたい。小西（2000）によると1．予測不能である，2．自力でコントロールできない，3．残虐でグロテスクである，4．自分が愛している人や大事にしている何かを失う，5．暴力的な出来事である，6．起こってくる結果について自分に責任があると感じる，このようなことが心的外傷をもたらす出来事だと述べている。性犯罪被害を見てみるとすべて当てはまることになる。

たとえば、自分の家の寝室に突然、侵入してきた加害者に刃物を突き付けられて「騒ぐと殺す」とか「写真をばらまく」などと言われて心身共に抵抗できない状態で性暴力を加えられた場合、または通いながれた通学路でいきなり自転車を倒されて襲われたり、歩いている時に車に連れ込まれて性暴力を加えられた場合など被害者の恐怖は計り知れないものがある。突然に加害者によって心身のコントロールを

奪われ、体や心に傷を負わされ、自尊心を傷つけられ、絶望感や自責感に苛まれるのである。性犯罪は「心（魂）の殺人」と言われることもあるくらいである。

では実際にどのような症状や反応が一般的に見られるか、また学齢期の児童・生徒の場合はどうかを次に述べてみたい。

性犯罪被害による症状・反応

（久留，2003）（小西，2000）（小西，2006）

被害直後の急性期

身体的症状・反応

傷・出血（切り傷、擦傷、裂傷など）、打撲（殴られる、押し倒されるなど）、不眠・睡眠障害、食欲不振、吐き気、下痢、性感染症、妊娠

心理的症状・反応

感覚の麻痺（暑さ、寒さ、痛みなどを感じない）、感情の麻痺（怖い以外の感情がわからない、淡々としている）、現実感の喪失（自分が自分でない感じ、身体がバラバラになった感じ、夢の中にいる感じ）、心因性健忘（事件の記憶が断片的、無理に思い出そうとするとパニック）、心因性朦朧（意識の状態が違う、行動の記憶がない）、夢中遊行（夜中に起きて行動するが記憶がない）、恐怖感、フラッシュバック、自責感、絶望感、人間不信、自尊心の低下、無力感、怒り、不公平感

行動的症状・反応

閉じこもり（人に会いたくない、不登校）、意欲・集中力の低下、自暴自棄

上記のような症状や反応は一般的に見られるものであるが、これは「異常な事態での正常な反応」と呼ばれるものであり、被害者がおかしくなったわけではない。また表現の仕方には個人差があるので、個別に理解するように心がける必要がある。被害者が未成年の場合には保護者も同じように傷つき辛い思いをしていることがあることも理解に入れてほしい。

学齢期の児童・生徒の場合は性犯罪被害に限らず、災害や事件・事故などで大きなストレスを受けた時には次のような反応が見られることが多い（文部科学省，2003）。

児童期では次のような退行現象が見られる。

赤ちゃん言葉を使う、べたべた甘える、乱暴な言葉遣いをする、イライラする、夜尿をする、きょうだい喧嘩が酷くなる、

一人で寝れない、暗いところを怖がる、
夜泣きが起こる、よく泣く、指しゃぶりを
するなどの赤ちゃん返り。

また他に学校の友だちへの興味が低下する、集中力がなくなる、成績が低下する、などのため登校しぶりが見られる。身体症状としては頭痛・腹痛などを執拗に訴える、物音へ過剰に反応するなどが見られる。

以上のような反応や症状は安心感を得るための行動であり、一時的なものと捉えるほうがよい。周りの大人がゆったりとした気持ちで接することが大切である。子どもが楽しみにできる計画を立てることがよいとされている。

思春期以降の学齢期の場合には退行的な行動や態度（年下のきょうだいと争うなど）が見られたり、責任ある行動が減少したりする。大人の反応に敏感で反抗的、非協力的になり、抑うつから引きこもるなどして家族関係が悪化したりする。集中力や成績が低下して反社会的な行動をすることもある。頭痛・腹痛などを訴えることや食欲の変化、睡眠障害が見られることがある。

この時期には言葉での表現が難しい場合に身体症状や行動の変化として表れやすいので、気持ちを話せる場を提供することや日常生活を大切にすることが必要である。学校では興味ある活動に参加しやすい環境を整え、積極的に関わらせるようにする。

学齢期の児童・生徒が事件・事故・災害などで大きなストレスを受けた場合の対応をまとめると次のようになる。どのようにその出来事を体験したかを理解することが大切である。信頼し依存している人たちの反応から意味づけするところがあるからである。「他の人に言ったらだめ」と言われると、その出来事はとても悪いことなのだと思いますかもしれないし、自責的になるかもしれない。反対に「怖かったね、でも大丈夫」と見守って味方になってくれる人の存在が安心感を与えるのである。周囲と温かいよい人間関係があることが上記に示したような症状や反応からの回復につながるといえる。そのためには二次被害を与えることがないように気をつけたい。周囲の人たちの心無い一言や無責任な噂話や世間体を気にした対応などが被害者をさらに苦しめることになるということを知っていてほしい。特に性犯罪被害とは単に性的な被害に遭うというよりも人間の尊厳を冒された、人間性を無視された屈辱感を伴う被害であると理解することが大切である。

このように安心感を持ってもらう対応に心がけていても症状が日常生活に支障をきたすほど酷い場合

や自殺企図が見られるような場合には専門的な医療機関の受診が望まれる。

PTSD（心的外傷後ストレス障害）

被害直後の急性期の症状・反応が回復に向かわず、一か月以上持続して慢性化すると PTSD の症状が見られるようになる。症状は長期間に亘るため、当事者の辛さが周囲の理解を得られにくいこともある。症状には大きく次の3つが挙げられる。

再体験

体験したことを自分の意志と関係なく繰り返し思い出したり、悪夢を見たりする。突然にフラッシュバック（生々しい感覚や体験したことの幻覚）が起こる。

回避

体験に関する場所、人、活動などを無意識に避けたり、思い出せなかったりする。

孤立感や離人感（自分が自分でない感じ）が生じる。

過敏

神経が興奮し過敏に反応する。不眠、イライラ、怒りっぽい、集中力がない、驚きやすい、びくびくする、別人のようになる。

PTSD は被害直後だけではなく、数か月後に起こることもあるので本人も周囲も気づきにくいことがある。心身の不調が PTSD の症状かもしれないと思う時にはトラウマ治療専門の医療機関への受診が必要である。学校や家庭での日ごろの見守りや良好な人間関係が早期の気づきにつながるといえる。

性犯罪被害に遭った 児童・生徒への対応・支援

性犯罪被害に遭った児童・生徒の被害直後の症状や反応については既に述べたが、被害を打ち明けられた場合にはどのように対応して支援していけばよいのだろうか。一般的な知識の裏付けの上で、まずは被害に遭った児童・生徒の言葉を聴き、心身の状態を理解するように努めることが大切である。被害を受けた状況が似ている場合であっても反応や症状には個人差が見られる。心身共にダメージを受けて登校が難しい場合もあれば、周囲に知られたくない、家族に心配をかけたくないと気丈に振る舞う場合もある。学校において児童・生徒から被害を打ち明けられた時や保護者から連絡を受けた場合はどのよう

に対応して支援すればよいかを児童・生徒本人に対してと家族に対してと分けて述べてみたい。

児童・生徒本人に対してであるが、まずは話したいことから話してもらうのが一番である。何から話してよいかわかっているようならば、まず体調を尋ねてみる。体の傷や痛みはないか、食欲はどうか、夜は眠れているかどうかなどである。その中で不安な気持ちなどが話される時にはゆっくり穏やかに聴いて受け止めてやり、悔しさ、怖さ、辛さ、悲しみなどの感情を表現することが回復の第一歩になることを伝える。本人が被害状況を自ら話す場合にはしっかりと聴くことが必要であるが、ほとんどの場合は初めから話題に出すことはない。初めは気持ちをゆっくりと受け止めながら、話したいことを話してよいのだと思ってもらう方がよい。多いのは自分を責めてしまうことである。「あの道を通らなければ…」「もう少し注意していれば…」など、自分に過失がないのに自分を責めてしまうのである。そういう場合はきっぱりと「あなたが悪いのではない、悪いのは加害者なのだ」と言ってほしい。年齢が低い場合には加害者から「誰にも言ってはいけない」と言われているために、言うことが悪いことと思っていることもある。嫌なことや怖いことをする人は悪い人だということを伝える必要がある。悪いのは加害者という姿勢で話を聴くことが大切である。被害に遭った後に教室に行きたくないと訴える場合がある。これまでの生活リズムが変化し、学校生活に対して意欲が湧かなかったり、何も悩みのない他の児童や生徒を見ると辛くなったりすることがある。そういう時には本人のペースを尊重しながら、いつもの学校生活や友だちとの関係を続けることが大切であるとわかってもらう。すぐには以前のようにはいかないかもしれないが、ゆっくりと時間をかけて自分の生活を取り戻そうと伝える。そして話をしたくなったら、いつでも話を聴くということを約束しておく。いつも見守ってくれる人の存在が学校生活での安心感につながるからである。

次に家族に対してであるが、性犯罪の被害の場合には特に母親のショックが大きいことが多い。母親の気持ちを受け止めながら、さらに家族全体の支援する力を高めるようにしたい。家族の無理解によって辛い思いをする場合が多く、逆に家族の支えがあったほうが回復につながりやすいからである。学校では家族の中でも母親の相談に応じることが多いと思われるが、学校が被害に対して理解を示すことが必要となってくる。家庭での対応については本人への対応と重なるが、次のようなことを伝えてほしい。本人には無理に話をさせず、話したい時に話したい

ことをゆっくりと穏やかに聴いてやる。被害について責めたり、特別扱いをしたりしない。悪いのは加害者であるという姿勢で接し安心できる雰囲気の家環境を整えることを心がける。心身の不調が続いても、次第に自分のペースで回復していくものなので、必要な手助けをしながらゆっくりと見守っていく。このような対応に心がけてもらうことや母親が学校生活への不安などがある場合にはいつでも相談に応じることを伝えておくことが大切である。

学校における支援についてまとめると、特別扱いをせずにこれまで通りに接することを大切にしながらも、心身の状態への配慮や学業への影響などに理解を示してほしい。特に通院の必要がある場合や裁判に向けての手続きがある場合には本人の気持ちの負担への理解を示して温かく見守ってほしい。人によって傷つけられた心は温かい人間関係の中で回復していくと言われているからである（Herman, J. L. 2010）。学校や家庭での温かい人間関係が本人なりのペースでの回復を促し、時間の経過と共にたとえ被害に遭っても自分の目標に向かって進んでいくという気持ちを育むことにつながるのである。

おわりに

筆者はこれまでに精神科の児童・思春期外来、スクールカウンセリング、犯罪被害者の心理相談の場で多くの学齢期の児童・生徒のカウンセリングを行ってきた。その中には性犯罪の被害に遭った児童・生徒も少なからずいたが、被害からの回復には家族の支えと学校の理解が大きく影響することを痛感してきた。学校全体からすればまれな事例であるため、管理職を始め担任教師や養護教諭が必ずしも被害者支援の基礎知識を持っているとは限らないということを経験してきた。今回は事例を挙げて実際の支援や回復の様子を紹介することはできなかったが、この拙稿を学校での被害者支援の基礎知識として役立ててもらえれば幸いである。

また犯罪被害者支援（相談や付き添い支援など）の専門機関である「公益社団法人くまもと被害者支援センター」^(注1)と性暴力被害者のためのサポートセンター「ゆあさいどくまもと」^(注2)の存在を性犯罪被害に遭った児童・生徒とその保護者に知らせてもらうことも支援の一つになると願っている。

性犯罪の被害に遭う児童・生徒が一人もいなくなることが一番であるが、残念ながらいなくなることは難しいようである。性犯罪を減らす何らかの防止策の必要性が望まれるところであるが、もし児童・生徒が性犯罪の被害に遭ってしまったら、早期の適

切な対応が必要となる。そして周囲の温かい見守りと支援の中で少しずつ回復に向かうのである。

註

- 注1 公益社団法人くまもと被害者支援センター
<http://www.k-v-support.jp>
- 注2 ゆあさいどくまもと
(性暴力被害者のためのサポートセンター)
24時間ホットライン 096-386-5555

文 献

- Herman, J. L. 中井久夫 (訳) (2010) 心的外傷と回復, 増補版. みすず書房.
- 久留一郎 (2003) PTSD ポスト・トラウマティック・カウンセリング. 駿河台出版社.
- 小西聖子 (2000) トラウマの心理学. 日本放送出版協会.
- 小西聖子 (2006) 犯罪被害者の心の傷. 白水社.
- 文部科学省 (2003) 非常災害時における子どもの心のケアのために (改訂版).
- 浦野エイミ (2019) スクールカウンセリングの歴史と実際—“チーム学校”の導入を見据えて—. 熊本大学教育実践研究, 第36号, 127-131.